

タイトル:平成 29(2017)年度 教育セミナー(第 13 回)

日時:2017 年 9 月 14 日(木)~17 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室(303)

「19 世紀後半のエジプトにおけるギリシャ系集団と在地の人々の

関係性について — 混合裁判所での係争を分析対象として」

出川 英里 (千葉大学大学院人文社会科学研究科)

はじめは緊張と不安でいっぱいだったものの、終わってみればとても楽しく、充実した4日間であった。以下、セミナーに参加しての感想を述べたい。

まず、先生方の講義や受講生発表を通じて、中東やイスラームに関係する様々な分野、地域、時代の研究に触れ、視野を広げることができた。さらに、講義や発表を自身の問題関心に置き換えることで、不足していた点に気づき、新たな発見を得ることもできた。研究を進めていく上で、対象とする地域・時代の専門性を深めつつ、一方で、広くアンテナを張り、様々なことに興味関心を持つ姿勢が必要だと感じた。

各講義では、内容はそれぞれ異なっても、共通して「研究対象への向き合い方」が示されていたと思う。先生方の実体験を踏まえた講義の中で、留学や現地調査は、研究対象とする地域の環境や人々の生活・考え方に接するチャンスだということを教えられた。

このことは、自身の史料や先行研究の読み方を考え直すきっかけになった。特に史料について、自分は文法的に正しく読むことで精一杯で(それすらできないことも多く)、史料の書き手や史料に登場する人々の考え方や行動の仕方にあまり目を向けられておらず、表面的な部分しか把握できていなかったと反省した。史料を深く読み込むためには、先行研究を読んで知識を蓄積していく一方で、現地の環境や人びとの生活と接する中で得られる感覚的な部分も重要なのだと思うようになった。

発表について振り返ってみると、分析対象設定の仕方の甘さ、史料分析の不十分さ、また、質問に対しても的確に回答できなかったなど、反省点ばかりが浮かんでくる。それでも、多くのコメントやご指摘をいただくことができ、貴重な経験ができたと感じている。また、発表の場だけでなく、準備段階でためになったことも多かった。専門用語や前提となる社会背景などの基本的な部分を整理できたし、それによって、問題関心の所在を改めて考え、明確にすることができた。学外で研究内容を発表するのは初めてで、不安も大きかったが、それ以上に得たものは大きく、思い切って発表を申し込んでよかったと思う。

他大学の大学院生と交流できたことも大きな収穫だった。こんなに多くの大学院生が中東やイスラームについて研究しているのだということに安心し、励まされた。普段、他大学の院生とはほとんど関わりの無い自分にとって、同世代の研究状況を知り、それについて意見を交わすことは本当に刺激的だった。

4日間の間に、新しい知識を得る楽しさ、議論の楽しさ、研究の楽しさが凝縮されていたセミナーだった。このような場を設けていただいた関係者の皆様にお礼申し上げます。ありがとうございました。